

---

# トランセンド

kan\_sta\_ku

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トランセンド

### 【Nコード】

N1801T

### 【作者名】

k a n | s t a | k u

### 【あらすじ】

少年が能力を取り戻すとき、全ては動き出す

その時世界は裏で争いが起こっていた

少年はその能力で世界をどう動かしていくのか……

なんかこれだと内容分かりにくいですね

まあ気になったら一度目を通してみて下さい

感想、アドバイスなど待ってます

## I PROLOGUE I (前書き)

初めてでお見苦しいかと思いますが、お手柔らかにお願いします

## I PROLOGUE I

### I PROLOGUE I

涛河高校、1年A組の教室、放課後…

「乃亜一緒に帰る」

「おう！…って実琉！わかったから毎回毎回抱き着くな！」

「…乃亜…私の事嫌いなのか…」

実琉の目にみるみる涙が浮かんでくる

「うつ！…あ、ああもう…そんなことねえから！」

「なーんだ！じゃ、いいじゃん。問題無し！」

実琉は途端に笑顔になり、乃亜の腕に抱き着き歩く

「あのなあ……はあー」

これはいつもの流れ

2人（斎藤乃亜と月影実琉）は一見恋人のようであるが、実際はただの幼なじみだ

乃亜は今度こそ1発言ってやろう!...と思うのだが毎度こうして打ち碎かれるのである

この日々がいつもの光景...これが当たり前だと乃亜は思っていた...

## 第1章 ー第1話 異変ー

### ー第1話 異変ー

乃亜は実琉と一緒に通学路を歩いていた

「実琉、今日なんか人通り少ないな」

普段なら乃亜の言葉にはすぐ言葉をかえす実琉だが、返事が返ってこない上、いつも笑顔の実琉が無表情である

「実琉？どうした？そんな怖い顔で」

「ちょっと静かに！私から離れないで」

（実琉なんか変だな、どうしたんだ）

乃亜は実琉の言う事を聞くことにした

しばらく歩くと実琉は路地に入ると同時に走り出す

乃亜は必死に実琉を追いかける

（てか実琉足はやつ、こんなに速かったか？）

突然後ろで爆発が起こる

「うわっ！！何だ！？」

「乃亜！！走って逃げて！！」

「実琉？いつたい？」

「いいから早く！」

実琉がそう叫ぶと同時に爆発が起こったほうから乃亜に銃弾が飛んでくる

乃亜は急いで物陰に避難する

爆発の煙がなくなると

そこには5人のバトルスーツのような物を着て銃を持った男たちがいた

「何だ一人だけか」

「でもあれ月影実琉ですよ」

「えっ？誰？聞いた事ないぞ」

「Aランクのトランセnderです。つい最近Aになったんですよ。まだほとんど知られていませんから、知らないのもむりないです」

「倒したら俺ら昇進ですね」



「一応例の物要請しとけ、1人だが相手はAランクだ」

「そうと決まれば行きますか」

男たちは実琉に向かって銃弾を撃つ

実琉は横に転がって避けると、手を前に突き出す

すると光が手の中集まる

光がおさまると手には1丁のロケットランチャーが握られていた

実琉はそれを男たちに向かって発射する

男たちの近くに着弾し4人を吹き飛ばす

4人はバトルスーツを来ていたため頭を打って気絶するにとどまった

（な、何が起きているんだ？）

乃亜は陰から戦闘を見ているが状況把握できないでいる

なんとかロケットランチャーで気絶しなかった一人が背中 of 機械から煙を排出する

辺りは視界が悪くなった

乃亜の位置からは実琉がかろうじて見えるくらいだ

すると突然実琉に先ほどの一人がナイフで切り掛かる

すると実琉はロケットランチャーを手放すロケットランチャーは光になる

実琉はまた手を前に突き出す

するとこんどは一振りの刀が現れ、受け止める

乃亜は目をこらし実琉の戦闘を見ている

すると実琉の後方辺りから唸るような音が聞こえる

（モーター音？）

音のするほうを見ると微かに大きな黒音のするほうを見ると微かに大きな黒い陰が見える

実琉は男のナイフを受け止めるのに必死で気づいていないようだ

突然男が実琉から離れる

（まさか！）

乃亜は陰から飛びだし実琉に向かって走り出し叫ぶ

「実琉！危ない！」

実琉に乃亜から声がかかる

「乃亜でてきちゃだめ！」

「そんなこと言ってる場合か！」

「だからだ、め……」

そこまで言って実琉は後ろにある何かにきづく

乃亜は実琉を抱きしめそのまま前に飛ぶ

その瞬間実琉が立っていた所にまばゆい光を放つ光線が通過する

「ちっ避けられたか、まだブツの存在を知られるわけにはいかない  
！……退却！」

煙がなくなり視界がはつきりした時にはそこには乃亜と実琉の2人、  
そして地面が一筋焼け焦げているだけであつた……

## ―第2話 もう一つの社会―

### 月影家の家

「乃亜、起きないよう…私のせいで…」

「実琉あなたのせいじゃないわ、時がきてしまった…それだけ」

乃亜は実琉を間一髪で助けたあと急に苦しみだし気絶してしまったのだ

「うう、ん？…あれ俺って」

乃亜が目を覚ます

「乃亜っ！よかった…」

突然実琉が飛びつく

「うおう！…心配かけて悪いな…、早紀さんもありがとつございます」

「いいのよ、私にとって乃亜は息子みたいなもんなんだし…それに乃亜の両親との約束があるし」

乃亜は現在実琉とその母親の月影早紀と3人で暮らしている

乃亜の両親と実琉の両親は親友であった

しかし、乃亜の両親、そして実琉の父親は2人が小さい時に死んでしまい、そのため現在は早紀が2人の世話をしている

「乃亜、少し話があるの、実琉も一緒にいらっしやい」

3人はリビングに移動する

「まず、とりあえず先に言っておくわ。この話を聞いたらもう後戻りはできない…それでも聞く？」

「……はい！」

乃亜はいきなりのことです惑ったが決心がついたのか、力強く頷く

「なら、まず……私と実琉、そして乃亜はトランセンドーよ」

「トランセンドー？」

「そう、簡単に言えば能力者のことよ。実琉が使ったのを見たでしょう？、この国には知られていないだけでたくさんトランセンドーが居る、そして中にはトランセンドーの存在を知る一般人もいて、トランセンドーを良く思わない人たちがいる」

「それってもしかしてさっき実琉を襲った？」

「そうよ」

「…でも、俺がそのトランセンドーだとしても、能力なんて使ったことないですよ？」

「そう、今回の本題はそこにあるのよ」

「俺が能力がないトランセンドーってことにですか？」

「そう、正確には能力がないんじゃない、使えない…いや使えなくなったトランセンドーってとこね」

「？…どういことですか？」

「乃亜はトランセンドーだったそれかなり強力な…普通トランセンドーはメインの能力が1つ、サブの能力はない人がほとんどで、1つある人が稀にいる、例えば実琉の場合は…」

「私は…乃亜は見たからだいたい分かると思うけど、メインは武器を造り出す能力、ただ、制限があつて、自分より小さい武器しか造り出せないよ、それに武器の形を精密にイメージする必要があるの、あとサブで、身体能力を1・2倍に出来る、その分反動で使い終わったあとものすごい筋肉痛になると使い過ぎると負担が大きすぎて肉離れ起こしちゃうの」

「そう、大抵能力は物心ついたときくらいに使えるようになる。そしてあなたもちょうどそのくらいに能力が発現したわ、でもその能力には問題があったのよ」

「問題…ですか」

「そう、それは普通1つのはずのメインが2つあったのよ」

「お母さん？確かに異常は異常だけどそれと乃亜が能力使えないのどう関係あるの？」

「そもそもメイン能力を使うとき脳をフル稼働してやっと使っているの、サブはメインを制御したときの余波みたいなものが働いて起きるからメインの能力の種類によったらいくつかあっても平気だし、メインと同時に使っても問題ないんだけど、メインを同時に使うと脳が処理しきれなくなるかもしれない危険性があつたのよ、そこで処理装置を脳に埋め込み自動制御して能力を抑えこんだ…」

「そんな！脳に装置を埋め込むなんて！」  
実琉が怒る

「しろうがなかったの…メインが2つだなんて前例がないし、制御しきれなかったら暴走したり、命を落とす可能性だつてあつた。初めは迷つてたのよ、でも乃亜が1度さっきのように気を失って生死の境をさまよつた。これしか残された手段はなかったの。そうして乃亜は能力を使えなくなった代わりに生き延びた。」

「でも早紀さんどうして今その話を？」

「どうやら乃亜は能力をとりもどしたみたいなの」

「えっ！でも装置があるって…」

「装置に関して問題があつたのよ、それは乃亜の能力と相性が悪かつたのよ、あなたの能力は、脳波検査によれば1つは範囲7m以内で

電気を操る能力、もう1つは1度触れた物の実体を見捨てる能力。もし制御装置の制御出来る範囲以上の能力が使用されれば、前者のほうではショートして機能停止、後者なら少し動いただけですぐに頭のなかから出てしまう。サブの方は脳波では分からないし、能力発現してすぐに装置を埋め込んだから、使っているところをみてないから分からないわ」

「なるほど、でも装置が作動してないってどうしてわかるんですか？」

「ああそれは…ほら」

早紀は乃亜に集積回路のようなものを取り出す

「これさっきの現場の近くに落ちてたの、それに私透視の能力あるから…とりあえず今話せることはこれくらいかしら…っと忘れるところだった…はいこれ、あなたのお父さんがこの時がきたら渡してつて」

ハンドガンのような形の物を取り出す

乃亜は少し動かしてみると曲がっていた部分が真っ直ぐになり短い棒状にもなることがわかった

「そう、私もそこまでは分かるんだけど、それ以外は…」

（？、情報が頭の中に入ってくる？）

乃亜はその情報のままに能力を使って電気を流してみる



「起動：使用者ヲ確認：斎藤乃亜ノ使用許可：使用者トノコネクト完了：斎藤乃亜を正式ナ使用者トシテ登録」

「うわっ！…すげえ」

棒は黒から銀色にかわり棒の先端からレーザーで出来た刃のような物がでてくる

乃亜は最初のハンドガンのような形に戻してみる

すると刃は無くなる

そこで乃亜は引き金が出来たことに気づく

乃亜は窓を開け、空に何も無いことを確認し引き金を引いてみる

すると今度は刃の出ていたところからレーザーのようなものが発射された

「スゴイね乃亜！…でもなんで使い方がったの？」

「なんかこれをみたら情報が頭の中に流れてきて…」

「そう…もしかしたらサブで機械関連の情報把握の能力があるのかもしれないわ、あと乃亜これだけは一応忠告するわ、絶対にメイン2つを同時に使わないように、小さい時よりは脳が発達していて、能力を両方持つことは出来てるから、制御出来るかもしれないけど…また同じようになる可能性の方が高いから」

「はい、わかりました」

警報が鳴り響く

「どうした何があった!!」

「地上から攻撃をうけました!」

「何故見つかった、トランセンダーの能力の干渉は受けないはず。  
なにで攻撃された?」

「見た目はレーザーですが、圧縮された電気の塊のようなものです、  
このようなことが出来るのはトランセンダーかと」

「くそうトランセンダーめ!絶対に潰す!…非常用ポッドで脱出するぞ」

非常用ポッドが発射した直後宇宙で小さな何かが爆発した

### ―第3話 組織と任務―

「あと、説明しなきゃいけないのは…協会についてかしら」

「協会…って何ですか？」

「正式名称TSS（Transsender Summary Society）、日本語でいうとトランセンドー統括協会ってとこね、トランセンドーは全員TSSに登録しなきゃいけない決まりなの」

「ちなみにお母さんはTSSのトップ12人の1人なんだよ」

「す、すごいですね…」

「ありがとう、でもいま2人空席があるのよね」

「えっ何ですか？」

「今、例の実琉を襲った組織と一部の無能力者を良く思っていないトランセンドーたちの組織が対立してよく戦闘があるのよ、TSSはその戦闘に介入して鎮圧してるんだけど、Aランクのトランセンドーでもトランセンドーと武装した人たちを同時に相手にして、それも非殺傷でやろうとするとかなりキツイのよ、2人はその戦闘でね…」

「そうなんですか…そういえばそのランクってなんですか？」

「ランクはTSSが定めるもので、そのトランセンドーの強さを表すもの、強い方からA、B、C、Dとあるわ、ほとんどがCとDで

Bが全体の30〜40%つてとこかしら、Aランクは現在トップ12人に所属してる10人と実琉くらいかしら」

「実琉もスゴいんだな！ー確かにさっき強かったもんな…でも何で実琉だけAランクなのにトップ12に入ってないんですか？」

「年齢的な問題がほとんどね、トップ12に入ると仕事や任務が忙しすぎて学校に通いにくいし…よし今日はもう遅いからこれくらいにしましょう、明日は乃亜の登録の更新に行かなくちゃいけないし、私はトップ12の会議もあるから」

次の日

TSS本部前

「うわあすげえ」

本部は周りの建物より遥かに巨大でデザインも近未来だ

「表向きは大手製薬企業の本社なの、さあ早く行きましょう」

早紀は建物の中をどんどん進んでいく

5分くらい歩くと大きな吹き抜けの部屋にたどりついた

「いよいよここが本部よ」

3人は受付に向かう

早紀は受付の人に小声で何かを話し封筒を渡す

受付の人は急いで奥に入って行った

3分ほどして若い男の人が出て来た

「紹介するわ、彼はトップ12の一人、道上拓海よ」

「紹介された通り、僕は道上拓海だよよろしく」

「斎藤乃亜です、よろしくお願いします」

「そうか、君が…あと、実琉ちゃん久しぶり」

「はいご無沙汰してます」

「今回はレベル測定の為に彼と模擬戦をしてもらっわ」

「ええええ！？こんなに強い人とやるんですか？」

「大丈夫よ、ここの模擬戦場は特殊でね、怪我したり死ぬってことはないのよ、そのかわり攻撃をくらうと情報化されてゲームみたいにメーターが減っていくの」

「いや、そういうことじゃなく…」

「それに、乃亜が測定するならランクAが相手じゃないとダメだと思っわ、はい文句言わない」

「はい…」

「それでは制限時間3分、開始！」

「乃亜君そちらからどうぞ」

乃亜はとりあえず様子見で電撃を飛ばす

拓海は軽々と避ける

「乃亜君？本気でやらないとすぐに終わっちゃっ…よ！」

拓海は氷の塊を飛ばしてくる

乃亜は電撃で相殺する

「やっぱりこんなんじゃないめか…なら」

拓海は氷の剣を創り切りかかってくる

乃亜は体を捻りぎりぎりでかわすと電撃を飛ばすが剣で受け止められる

「電撃相手に接近戦はキツイか…使うとは思わなかったが」

拓海は両手を地面につける

すると部屋中が氷で覆われていく

乃亜は足下に電気を流し自分の周りだけは氷が来ないように防ぐ

「そうくると思ったよ、だけど僕にとってこのフィールドは有利だ！」

すると拓海は一瞬で乃亜の背後に着き蹴りを入れる

（さっきより早いっ！）

乃亜は前に思い切り飛びのき回避する

「これは能力ばかりに頼ってられないな」

今度は乃亜が一瞬で拓海の背後に入り蹴りを入れる

拓海は氷で蹴りを入れられる部分を覆い防ぐ、拓海にダメージはないが氷は粉々に砕け散る

拓海は距離をとる

「なんてキック力だ…もう時間も少ない、次で終わらせてもらおう」

拓海は再び氷の剣を創る

そしてさっきより遥かに早いスピードで突きを入れる

乃亜は動こうとしない

「決まった!」

そして剣が乃亜の体を貫く

しかし乃亜はダメージをくらっておらず剣は乃亜をすり抜けている

「!?!? どういうことだ!?!」

拓海に一瞬の隙ができる

乃亜はその瞬間を逃さず後ろに回り込み電撃を放とうとする

そこでブザーがなった

「そこまで、両者ノーダメージでこの模擬戦ドロ! 乃亜頑張ったわね、拓海はちよつと熱くなりすぎじゃない?」

「久しぶりに熱くなっちゃったよ、乃亜君強いね、測定が終わっていないから何とも言えないけど確実にAランクだと思うよ、それにしても最後のとあの高速移動は能力かい?」

「最後のは能力ですよ、高速移動は昔早紀さんに教えてもらった戦闘術です」



「教えたって言うても理屈を教えただけじゃない、私だってできないわよ？」

「ひそかに練習してたんですよ、いやぁ修得するの大変でしたよ」

「まさかあれをできるようになる人がいるとはね…拓海」

「はい…それもあの人の…いやあの人のだからこそでしょうか…それにしてもあの乃亜君、それに実琉ちゃん、もはや僕たちトップ12でももしかしたらかないませんよ」

模擬戦が終わってから、受付で昨日の戦闘の報告をしていた実琉が戻ってきて乃亜に声をかける

「乃亜かつこよかったよ！」

「ありがとう」

「乃亜、実琉、私たちは会議に行ってくるから待っててね」

2人は奥に入っていった

「二人ともお待ちせ、さぁ帰りましょう」

「早紀気をつけて、乃亜君と実琉ちゃんもね」

「はい、今日はありがとうございました」  
3人は拓海と別れた

「二人とも、ちょっと話が…」

「何？お母さん」

「さっきの会議でね…ちょっと決まったことがあって」

「勿体振らずに言つてよ母さん」

「2人をトップ12に…加入することが決定して、2人にはさらにある新しくできた役職に就いて貰うことになったの…私は正直反対だったんだけどね」

「役職？」

「PMSF（特別公安風紀維持特殊戦闘員）よ」

「PMSF？」

「昨日も言ったけど、今一部のトランセnderと無能力者のいわば戦争が起きてるでしょう？基本的にはその戦闘に介入、終息するところが仕事よ」

「俺たち2人だけでですか！？」

「いいえ戦闘介入はトップ12やTSSの精鋭部隊もやるわ、あなたたち2人でやるのは戦争自体を止める為の任務よ」

「何で私たちなの？」

「まずランクAであるにも関わらずまだそんなに知名度がないこと。そして、まだ幼いという理由から、体が大きくない為潜入向き、警戒されにくい、また万が一戦闘になっても相手の油断を誘うことができる、こと。最後に2人の能力が向いているということが理由ね。私からしたらやはり不安だわ、TSS側の意見からいえばもう手一杯で打開策がこれしかない。頼みの綱があなたたちだけなの」

「そうなんですか…ならやるしかないか」

「乃亜がやるなら私もやるよ」

2人は明るく言うが真剣だった

「そう、分かったわ…じゃあ改めて…斎藤乃亜、月影実琉の二人をトップ12、そしてPMSEに任命します」

「はい！」

そして2人の新たな日々が始まった

## ―第4話 初任務―

「「いつてきます!」「」

「実琉、乃亜いつてらっしやい」

2人は家を出ていつもどおり歩いて学校へ向かう

そう、いつもどおり……

「こら実琉、引っ付くn」「やだ!」「…はあ」

「乃亜は私のこと嫌いなんだ…うう」

実琉は涙目になる

「だ、だからそうじゃないって!」

「じゃあ私のこと好き?」

「なっ!?!…あ、ああ（幼なじみとしてだが）」

「そっかあ …えへへえ」

実琉はさっきの涙目が嘘のように笑顔になる

「はあー」

そんないつものやりとりをしながら2人は学校に着く

昼休み…

放送がなる

「斎藤乃亜、月影実琉、至急校長室へ」

「なんだろうね？」

「まあ行ってみるしかないだろ」

2人は校長室へ向かう

乃亜はノックして校長室に入る

「失礼しまーす」

「おう2人とも、待ってたよ」

「用件はなんですか？」

「ああ、2人に初任務だ」

「「えっ？」」

「おっと、言ってなかったね、私は神木道明<sup>かみきみちあき</sup>だ、トップ12の1人で、TSSの精鋭部隊のリーダーもやってるんだ。まあもちろんこの校長もだけどな」

「それで任務とは？」

「この近くで小さい戦闘があるっていう情報がエージェントからきた」

「それに介入して阻止すればいいんですか？」

「ああそうだ、小さい戦闘だから慣れるのにはちょうどいいだろう、それでは行くよ。俺につかまって」

2人は道明につかまる

「はい到着」

「「えっ？」」

「ハハハ、驚いたか？」

「隊長！戦闘は始まってますよ！」

「じゃあ俺らはトランセンドー相手にする、2人とも油断するなよ」

道明はまた消える

「乃亜！行くよ！」

「いわれなくとも！」

2人は駆け出す

乃亜は例のデバイスを取り出し剣の形にする

実琉は手を前に出し、アサルトライフルを作り出す

2人の前には10人のフラッター（武装した無能力者）

乃亜は正面から突っ込む

10人が一斉に乃亜に射撃する

「乃亜！」

「やばっ！……なんてね」

全ての弾が乃亜に当たる前に静止している

「そらよっ！」

弾が発射した人の所に跳ね返る

それによって7人が倒れる（無論急所は外してある）

3人のうち1人が切り掛かってくる

乃亜はあえて懷に飛び込み相手の剣を根本から切り、電撃を浴びせ  
気絶させる

その時乃亜の後ろから1人が切り付ける

（今度はマジでやばいつ）

そこで銃声になり相手は倒れた

「乃亜大丈夫？」

「サンキュー！実琉ナイスフォロー！」

最後の1人が何かを投げる

（？…あれは！）

「実琉目閉じろ！」

「えっ？」

その瞬間閃光が広がる

「乃亜！大丈夫！？」

「あ、ああ、ぎりぎりで気づけてよかった…あいつは逃げたか、ま  
ったくスタングレネードなんて面倒な物投げやがって…ん？この霧  
と音…まさか！」



「どうしたの？乃亜？きゃあ！」

乃亜は実琉を抱きしめ思い切り横に飛ぶ

すると前にみた光線が2人のいた所を通り過ぎる

「くっ」

乃亜は光線が発射された所をデバイスで撃つがそこには何もいなかった

（いったいあれはなんだ？）

乃亜は考えこむ、今の2人の体勢に気づかず…

「おー、お二人さん熱いねー」

「へっ？…ああ！ゴメン実琉」

「あっ！…う、うん／＼」

乃亜は道明に言われすぐに離れる

実琉は赤くなっていたが、乃亜が離れると少し残念そうな顔をする

「月影、頑張れよ。俺は応援してるぜ」

「はい！神木さん！」

「え？何のこと？」

「あちゃー、こりゃ月影、大変だな」

「もうっ、乃亜のばか」

「だから何のことだって！」

道明に呆れられ、実琉に可愛く怒られたが、いっこうに理由がわからない乃亜であった

## ーキャラ設定ー（前書き）

タイトルどおりキャラ紹介ですよー

## ーキャラ設定ー

さいとう  
斎藤 乃亜

16歳

能力 Aランク

メイン 電気を操る＋物質の実体を無視する

サブ 見た機械の情報を得る

本作品の主人公

両親は幼い頃に死んで、現在は幼なじみである実琉の家に住み、実琉の母親である早紀が母親代わり

武器に父親が生前作ったデバイスを使っている

脳に負担がかかる為メイン2つは同時に使わないようにしている

恋愛に関しては鈍感？

トップ12で実琉とPMSFを勤めている

つきかけ  
月影 実琉

16歳

能力 Aランク

メイン 武器の創造（制御が難しい）

サブ 身体能力1・2倍（反動あり）

本作品のヒロイン

乃亜の幼なじみ

父親は乃亜の両親と共に死んだ

戦闘は真剣そのものだが普段は可愛い女の子、いつも乃亜と一緒にいてよくくっついてる

乃亜のことが好き？

トップ12で乃亜とPMSEを勤める

つきかけ  
月影 早紀 さき

38歳

能力 Aランク

メイン？

サブ？

実琉の母親で乃亜の母親代わり

透視できるようだが厳密な能力は不明

夫と乃亜の両親とは元から親しい仲だったようだ

トップ12に所属

道上 みちがみたくみ  
拓海

35歳

能力 ランクA

メイン？

サブ？

トップ12の1人

早紀とはそれなりに仲がいいようだ

乃亜との模擬戦闘で氷を操っていたが厳密な能力は不明

神木 かみきみちあき  
道明

42歳

能力 ランクA

メイン？

サブ？

トップ12の1人、TSS精鋭部隊のリーダー、そして乃亜と実琉が通う高校の校長も勤める

交友関係は不明

瞬間移動のようなことをしているが厳密な能力は不明

## ―第5話 転校生―

「じゃあ席に着けえー、HRはじめるぞー」

担任の先生がクラスに入ってくる

「伝達事項は……得には無いな……おっとそうだ、今日は転校生が来てるぞ、入ってこい」

先生が言うと、女の子が入ってきた

そこで隣に座る未琉が話かけてくる

「乃亜？あの子ハーフかな？」

「どうだろ？、多分そうじゃないか？」

未琉がそういうのも当然、入ってきた女の子は髪は黒ではあるが、目がピンクと水色のオッドアイだったからだ

「じゃあ自己紹介してくれ」

先生に言われ、おじぎを返してから再び前を向き彼女は口を開く

「……ミト……よろしく……」

ミトは無表情にそう言った

「あのなあ……まあいいかじゃあ席は「あそこ……」ん？」



ミトは乃亜と実琉が座っている辺りを指した

「うーん…そこいらで席譲ってくれるやついるか？」

先生が聞くが手を挙げる人はいない

突然ミトが両手をかざし、体全体が淡く光る

「っ！…実琉！」

「うん！」

2人は思わず身構える

すると乃亜の前に座っていた女子がミトと同じように光を放ちながら手を挙げた

「私…譲ってもいいです…」

「そうか、じゃああつちの空いてる席に座ってくれ」

乃亜の前にすわっていた子は空いていた席に移動する

そして座ると2人とも光が消えた

「じゃあお前も座れ、お礼言っとけよ」

ミトは先生に言われ、席に着く

「これでHR終わり、解散！」

先生が出ていくと何人がミトの周りに集まってくる

「ねーミトちゃん」

「何？……」

「なんで転校してきたの？」

「機密事項……」

「じゃあ好きな子とかいるの？」

「好き？…大事ってこと？」

「大事…うーんまあそうかな」

「乃亜と実琉……」

「うーんそういうことじゃなくて…というか斎藤君と月影さんはミトちゃんと知り合い？」

そう言われ2人は考える

「うーん何か覚えてる？乃亜？」

「そーだなあ「乃亜…」ん？うわっ！」

突然ミトが乃亜に抱き着いた

「なっ！ミトちゃんだけずるいつ！私も！」

と実琉も乃亜に抱き着こうとするが…

「…あれっ？こんなやり取り前に…デジャヴかな？乃亜？」

「いや俺も何か覚えが…でも思いだせないな…」

「ん？」

ミトが首をかしげる

「…ああ気にしなくてもいいよ、とりあえず知ってるみたいだけど、俺は斎藤乃亜でこっちが」

「月影実琉だよ、よろしく」

「よろしく……後で話…昼休み…屋上…来て」

そう言ってミトは座ってしまった

昼休み、屋上…

「それでミトちゃん、話って？」

実琉がミトに尋ねる

「ここに来た役割…」

「役割？」

「そう…私は2人を守る為に来た…」

「俺達を…守る為？」

ミトは頷く

「守るって何からのの？」

そう言った途端、急に霧が出始めた

「これってまさか「来る！」」

ミトは実琉と乃亜を突き飛ばし、自分も前に飛び退く

すると、そこにレーザーのようなものが通り過ぎた

「これってこの前の…」

突然辺りに男の音が響く

「外したか…おっ試作0号M型、そんなところに…ちょうどいいま  
とめて消しさってやる」

「?…この声どこかで…あっ！」

「えっ？どうしたの乃亜？」

「さっきの声子供の時によく行ってた公園の近くにあった研究所のおじさんの」

「あっ！言われてみれば…ってことはミトってあのミト！？」

「だろうね、やっと思い出したよ」

「でもあの時のミトはもっと明るかったよお」

「うーん…待てよ、ここまでの事を考えると…」

乃亜が考えていると2発目が乃亜に向かって来た

するとミト光りながら瞬時に乃亜の前に立ち手をかざした

するとレーザーはミトの手ところで消え去った

そして手を振るとレーザーがミトの手から放たれた

遠くで何かが爆発した

「くっ！やられたか！いつか必ずお前らをつ！」

ミトはふりかえり乃亜に聞く

「乃亜…大丈夫？」

「ああ…ありがとうミト」

乃亜はそう言いながら能力を使う

「推測通りなら……やっぱりか」

「乃亜何か分かったの？」

「ああ、ミトは……アンドロイドだ」

「えええ！？本当！？」

「ああ、情報を読み取れるからな……ん？これって…」

乃亜がミトの頭にふれる

「ちょっと悪いな」

そして乃亜は頭に電気を流した

「エラー10352…感情制御装置に攻撃を受けました。装置防衛モードに移行します」

「乃亜！な、何が起きたの？」

「頭の後付けの感情を抑える装置が付いてたから、昔みたいじゃないのはコイツのせいだと思って電氣流して壊そうとしたら、防衛モードに入っちゃった」

「えっそれって……」

「ああ、ものすごくマズイ事になった」

「攻撃を開始します」

「っ！来るぞっ！」

「うん！」

そしてミトが2人に襲い掛かってきた：

―第6話 旧友の救出―（前書き）

更新遅れちゃいました

すいません



## ―第6話 旧友の救出―

実琉は、アサルトライフルを作り出し、飛びかかってきたミトに牽制で発砲する

「攻撃確認…回避…反撃」

ミトが左手をかざすと、弾が弾道をそらされた

そのまま空中で前に回転して、実琉にかかと落としする

実琉はアサルトライフルで受け止めるが、真つ二つにへし折れた

「実琉！！大丈夫か！？」

乃亜は実琉に駆け寄りつつ、電撃を放つ

ミトは、反動で後ろに飛び退きかわす

「実琉！！援護頼む！！」

「おっけー」

乃亜はデバイスを剣に展開して走り出す

「対象接近…迎撃」

「とつとつ、目を覚ましてくれよっ！！」

乃亜は、勢いのまま横にデバイスを振る

ミトはしゃがんでかわし、ローキックを放つ

「くっ!!」

乃亜はバック転でかわす

その間に実琉は再びアサルトライフルを作り出し、ミトに発砲する

ミトはそれをバックステップで避けた

「……追撃」

ミトは、低い姿勢から乃亜に向かって、一気に飛び出す

乃亜はデバイスを銃に変え、ミトに向かって撃つ

ミトは体制を低く保って走り、かわしながら乃亜に襲いかかった

「危なっ!!」

乃亜は、思い切り横に飛び退く

「今度は私がっ!!」

実琉はハンドガンで撃ちながら、走る

ミトは上に飛び上がってかわす

実琉はハンドガンを手放し、今度は短剣を作り出す

そして、空中にいるミトへ切りかかる

ミトは体をひねってかわし、その勢いで回し蹴りを放つ

「やばっ!!……きゃっ!!」

実琉はとっさに腕をクロスし受け止めたが、下にたたき落とされた

「実琉!!……おらっ!!」

乃亜はデバイスで空中で不安定な体制なミトを撃つ

ミトはかわしきれず、電撃の弾が右肩にかすった

「右肩負傷……」

「ミト!! 乃亜だ!! 思い出してくれ!!」

「危機状態……リミット解除」

「まだダメみたいだね……」

「ああ、気を抜くなよ……おわっ!!」

「えっ!?! 何!?!、きゃあ!!」

突然ミトがものすごいスピードで突っ込んできた

二人はなんとかギリギリで避ける

実琉は短剣を手放し、サブマシンガンで撃つ

ミトは振り返り気にせず再び二人のほうへ向かってきた

すると、弾がミトに当たる直前に全て消え去ってしまった

「っ！？なんだ今の」

今度は乃亜が電撃を放つが同じようにかき消される

「まさか…あつダメだ！！実琉！！」

実琉は再び短剣で切りかかっていた

「間に合えっ！！」

乃亜は実琉の所へ駆け出す

実琉の短剣はミトへと届く前に消えてしまう

「えっ！？」

ミトは隙を逃さず、実琉に殴りかかった

乃亜はギリギリで実琉を突き飛ばし、庇う

「ぐあっ!!」

「乃亜っ!!」

乃亜はミトに殴られ、吹き飛ばされた

「乃亜っ!!大丈夫!？」

「ああ」

「あれ、どうなってるの？」

「仕組みは分からないけど、能力の攻撃を無効化してるみたいだ」

「そんなことって!？」

「俺も信じがたいけど、それなら納得がいく」

「……ごめんね、私の不注意で……」

「いや、いいんだ、実琉が無事が一番だ」

乃亜はそう言って立ち上がり、ミトに向かい合う

「さーで、久々に派手にうごきますかぁ」

そして、次の瞬間…乃亜はミトの目の前にいた

「これが、今のお返しだっ」

乃亜はミドルキックを放つ

ミトは腕でガードする

「次は実琉を狙ったぶんっ」

乃亜はガードで跳ね返った反動のまま、回転して手刀を叩き込む

ミトはしゃがんでかわす

「きちんと……くらっとけっ」

乃亜はその回転を利用して、後ろ回し蹴りをする

ミトはまたガードするが強烈な蹴りに弾かれ、よろける

「次は、俺たちのことをわすれて、暴走してるぶんだっ!!」

「かはっ!!」

再び放たれたミドルキックが横腹に入って、倒れた

しかしミトは立ち上がり繰り返し殴りかかる

乃亜はすべてをかわしていく

「乃亜……助けて……」

しかしその時、ミトは攻撃しながらもそう言い、目からは光るもの

が、流れ落ちた

「ああ、最初からそのつもりさ」

乃亜はミトの攻撃を弾き返し、バックステップで距離を取ると同時に目線で実琉に合図する

実琉は頷き、飛び出してきてミトを後ろから羽交い締めにする

「さあ、これで、戻ってこいっ!!」

乃亜は拳を前に突き出した状態で、一瞬で再び距離を詰めた

ミトの顔の前で拳がとまった…と同時にミトの頭の中で何かが壊れた音がした

そして、ミトは微笑みながら倒れた

「やった…のかな？」

「ああ、おそらく…」

「最後何をしたの？死んでないよね」

「ああ、死んでない…うーん簡単に言えば感情制御装置ピンポイントに打撃を加えたんだ」

「そんなこと出来るの!？」

「ああ、これも前に言った早紀さんに教えて貰った技だよ」

「すごいねっ!!」

「ああ、ありがた……かはっ」

突然乃亜が血を吐き出した

「乃亜っ!？」

「やっぱり久々で酷使しすぎ……たか……」

「ちよつと乃亜っ!!乃亜っ!!……」

実琉の呼びかけを聞きながら、乃亜の意識は 遠のいていった……



―第6話 旧友の救出―（後書き）

―応どの小説も放棄することはないですよ

できるだけ早く更新できるように頑張りますっ！！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1801t/>

---

トランSEND

2011年10月9日02時47分発行